帝塚山大学心理科学論集 2018年 第1号 pp.1-12

原著論文

大学入学者の大学生活への適応プロセスに関する研究[1]
ー入学から卒業までの変化および偏差値の影響についてー

水野 邦夫

問題

文部科学省(2017)によれば、平成29(2017)年3月時点における高等学校(全日制・定時制課程)卒業者(1,069,754名)のうち、大学等進学者の数は585,339名(対全体比54.7%)であり、若年層の大学進学率は年々伸びているようである。その一方で、大学に入学したものの、さまざまな理由から大学生活に適応できない学生の存在が指摘されている。岩田・林・佐藤・奥野(2016)は、2015年度の学生相談機関への学生来談率の平均が5.7%であり、2009年度の調査時(2.8%)よりもほぼ倍増していることを報告しているが、このことからも、大学生活において何らかの問題を抱える学生が増加していることが窺える。

一方で、大学入学者の大学への適応については、これまでさまざまな研究が行われてきた。そのひとつの流れとして、不適応の原因について調べるものがあり、学習・学力の問題や人間関係の問題(例、濱名 2004; 広沢, 2007; 谷島, 2005)、不本意入学(例、山田, 2006)などが代表的な原因として挙げられている。

もうひとつの流れとして、適応のプロセスや変化に関する研究がある。たとえば太田・甲村・児嶋(2008)は、大学1年生の適応感について約1年間にわたって縦断的調査を行い、4月から7月にかけて被信頼・受容感が上昇しつつも、拒絶感のなさが低下したり、授業意欲が低下したりすること(ただし、9月と1月では授業意欲の低下以外は有意な差は認められなかった)などを見出している。また高下(2011)は、大学新入生の4月から7月にかけての適応的変化について調べ、身体面では倦怠感が増加する傾向があること、学習や対人関係の不安は緩和される一方で授業意欲が低下すること、大学の仲間関係に馴染んでゆくこと、就職への不安感が高まり、将来への迷いも生じてくることなどを報告している。さらに大隅・小塩・小倉・渡邉・大崎・平石 (2013)は、大学新入生の4月下旬から10月下旬にかけての大学適応感について縦断的調査を行い、4月下旬の適応感が7月上旬や10月下旬よりも高く、7月と10月の間に差がみられないことを明らかにしている。これらのことから、入学直後からその後にかけて、さまざまな適応指標において、上昇するものもあれば、むしろ下降するものもあることが看取される。

しかしながら、適応プロセスに関する研究の多くは、入学直後からぜいぜい1年次終了時期に焦点を当てたものが多いようである。これは、入学期(入学しておよそ1年くらい)が、受験生としての心理的課題を終えて入学前の生活や人間関係に別れを告げること、新しい生活・修学環境に慣れて内発的な修学意欲や人間関係を築いていくこと、大学生活の目標と将来像の模索・自分のあり方や性格に向き合い新たな自分を探し始めることといった、大学に適応していくための高いハードルを有していること(吉良, 2001)や、大きなストレッサーに対処しながら次々とスケジュールをこなしていかなければならない適応への正念場であること(山田, 2006)、とりわけ大学1年生の前期は学生の今後の大学適応状態がある程度決まる時期であると位置づけられること(高下, 2011)など、大学生活へ適応していくための重要な時期と捉えられていることが影響していると考えられる。しかし、大学生活はその後も継続されるものであり、この時期だけに焦点を当てるのではなく、卒業までの長いスパンで捉えていかなければ、大学入学者が大学生活へ適応していくプロセスや特徴を充分に把握することはできないであろう。

そこで、より長期的な観点から大学への適応プロセスを捉えた研究に注目すると、田中・菅(2007)は横断的な調査を通して、1年生と4年生の間に大学不適応感に有意な差がみられることを見出し、全体的な傾向としても、学年が上がるにつれて不適応感が低下していくと述べている。また、奥田・川上・坂田・佐久田(2010)は、横断的・縦断的な調査をもとに、4年生は下級生よりも大学生活へのフィット感や交友満足感が有意に高く、不安が最も低いこと明らかにしている。これらの結果から、大学4年間を通じて、大学入学者は大学生活に対して適応的な方向に進んでいくことが窺える。しかしその一方で、これらの研究は調査時期が各学年のある1時点に限られていることから、より詳細な適応プロセスを捉えきれていないという感が否めない。そこで本研究は、各学年の節目の時期である前期・後期の開始および終了期に継続的に調査を行い、入学から卒業までに至る、より詳細な適応プロセスを検討し、その特徴を明らかにすることを目的とした。

ところで、大学生活への適応には各大学の持つ特徴が少なからず影響すると考えられる。とりわけ巷間では、大学の偏差値が取り上げられるようである。これについて、清水(2013)は、読売新聞が実施している「大学の実力調査」の公表データなどを用い、社会科学系の大学における退学率を予測する要因について分析を行っている。その結果、偏差値の低さは退学率をかなり高く予測し、受験形態や充足率、国公立・私立の違いを統制しても、有意に予測することを明らかにしている[2]。また、ベネッセ総合研究所高等教育研究室(2007)は、入試難易度(偏差値)の高い大学の学生ほど満足度が高いことを報告している。これらのことか

ら、偏差値が大学入学後の大学生活への適応に何らかの影響を及ぼすことが推察される。しかし、偏差値の高さと大学生活への適応との関係を直接的に扱った研究については、管見の限り、ほとんどみられないようである。そこで本研究では、偏差値が大学適応のプロセスとどのように関連するのかについても検討を行った。

研究1

研究1では、大学へ入学した学生が卒業するまでの間の大学生活に適応していくプロセス(変化)を調べ、その特徴を明らかにすることを目的とした。大学入学直後から2年次終了時(1月期)までは縦断的調査に基づいたデータを、3年次4月期から4年次終了時(1月期)までは基本的に横断的調査に基づいたデータをもとに検討を行った。

方法

調査協力者

Ⅰ群:2011から2013年度に、近畿圏の1大学の心理学科に入学した大学生に対し、下記尺度への回答を依頼したところ、343名(男子122名、女子221名)がこれに応じた[3]。

Ⅱ群:2008から2013年度に同学科に入学した者のうち、2011年度から2016年度の間に3年次から4年次に在籍した学生に対しても、同尺度への回答を依頼したところ、160名(男子63名、女子97名)がこれに応じた[4]。

大学適応に関する尺度

大学への適応感を測定するために、二宮(1990)の「学校生活に対する意識の調査項目」を尺度として用いた。この尺度は学校適応－脱学校(以後、大学適応尺度という)15項目および仲間志向－孤立志向(以後、仲間志向尺度という)11項目の計26項目からなる[5, 6]。回答に際しては、「非常にあてはまる(5)」から「全くあてはまらない(1)」までの5段階で評定できるようにした。

調査手続き・調査時期

調査は授業時間の一部を利用して行った。被調査者には文書または口頭で調査目的(大学生が大学をどう捉えているかを調べること)について説明し、調査に協力できる場合は回答するように依頼した。また、回答したくない場合はその権利を保障し、拒否することによる不利益は一切生じないことを約束した。

調査時期については、Ⅰ群は、2011年度から2013年度にかけて、1～2年次の概ね4月中下旬(以後、4月期)、7月中下旬(同、7月期)、9月下旬～10月中旬(同、10月期)、1月中下旬(同、1月期)の4回にわたり調査を行った。Ⅱ群も2011年度から2016年度の同時期に行った。

結果

分析にあたり、IBM SPSS Statistics 22およびExcel 2013を使用した。また、尺度への回答洩れのあるデータについては、当該分析の都度に除外したため、分析によってデータ数が異なる。

尺度の因子分析

Ⅰ群(1~2年次)のデータをもとに、大学適応尺度、仲間志向尺度について調査時期ごとに因子分析(最尤法・プロマックス回転。以下同様)を行った。仲間志向尺度については、Kaiser-Guttman基準により因子数を求めたところ、いずれの時期も2因子解が得られたが、因子間相関は概ね高かった(絶対値で $.530 \leqq r \leqq .693$)ので、1因子性のものと判断した。一方、大学適応尺度については、同様の基準で因子数を求めたところ、1年次1月と2年次10月は5因子解、その他は4因子解が得られ、大学への信頼、登校拒絶感、受講への苦痛、居心地に関する因子が見受けられたが、時期によらず因子構造が安定しているとはみなしにくいところもあったため、各時期のデータを込みにして分析を行い、Scree基準および解釈可能性を考慮し、4因子解を採用した。第1因子は「学校の先生に対して親しみを感じる」や「この学校に対して親しみを感じる」などが高く負荷しており、「大学への信頼感」と解釈した。第2因子は「学校の授業は時間のむだだと思うことがある」や「授業を受けているのが苦痛である」などが高く負荷し、「受講への苦痛」と解釈した。第3因子は「学校に行きたくないと思うことがある」や「学校を休みたいという気持ちになる」が高く負荷しており、「登校拒絶感」と解釈した。第4因子は「私にとって学校はいごこちが悪い」や「今の学校生活に満足している」が高く負荷しており、「居心地のよさ」と解釈した[7]。

なお、各時期のデータを込みにした場合の大学適応尺度の因子パターン行列・因子間相関ならびに仲間志向尺度の因子負荷行列(1因子解)をTable 1に示す。

尺度の信頼性

大学適応尺度と、同尺度の各因子で因子負荷量が.400以上の項目からなる下位尺度[8]および仲間志向尺度の信頼性(内的整合性)を調べるために、各調査時期におけるCronbachの α 係数を算出した。その結果、大学適応は.797(2年次10月期) $\leqq \alpha \leqq$ .8426(1年次1月期)、大学への信頼感は.734(1年次4月期) $\leqq \alpha \leqq$ .794(2年次1月期)、受講への苦痛は.633(1年次10月期) $\leqq \alpha \leqq$ .691(1年次4月期)、登校拒絶感は.853(2年次1月期) $\leqq \alpha \leqq$ .891(1年次1月期)、居心地のよさは.632(1年次4月期) $\leqq \alpha \leqq$ .728(1年次1月期)、仲間志向は.847(2年次10月期) $\leqq \alpha \leqq$ .862(1年次4月期)であった。これらより、各尺度は概ね充分な高さの内的整合性を備えており、調査時期による信頼性のぶれも小さいと考えられる。

入学直後から2年次終了期までの適応感の変化

大学に入学してから2年間で大学への適応感がどのように変化するかを調べるために、Ⅰ群のデータのうち、全ての調査時期に回答した者について[9]、男女別に各調査時

Table 1　学校生活に対する意識の調査項目の因子パターンおよび因子間相関

	質問項目	因子 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
	＜大学適応尺度＞				
	学校の先生に対して親しみを感じる。	**.828**	.002	-.024	.065
	先生には安心して何でも相談できる。	**.715**	.072	-.104	.074
	この学校に対して親しみを感じる。	**.537**	.024	.053	-.394
	この学校の学生であることを誇りに思う。	**.474**	-.094	.080	-.196
＊	学校の授業は時間のむだだと思うことがある。	.023	**.739**	-.053	.039
＊	授業を受けているのが苦痛である。	-.050	**.540**	.222	-.071
＊	授業中でも、おもしろくなければ別のことをしていてもかまわないと思う。	.067	**.446**	.039	-.009
＊	学校に対して反発を感じる。	.143	**.424**	-.015	**.409**
	学校で受けている授業はよく理解できる。	.307	-.341	-.083	.213
	学校の規則はよく守る方だ。	.175	-.308	.078	.059
	学校での勉強は、将来の生活や職業に役立つと思う。	.269	-.300	.118	-.093
＊	学校に行きたくないと思うことがある。	-.011	.003	**.871**	.088
＊	学校を休みたいという気持ちになる。	-.024	.007	**.848**	.033
＊	私にとって学校はいごこちが悪い。	.098	.032	.118	**.704**
	今の学校生活に満足している。	.148	.135	-.022	**-.667**
	因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	
	Ⅱ	-.336			
	Ⅲ	-.308	.477		
	Ⅳ	-.418	.484	.359	
	＜仲間志向尺度＞				
	友だちと一緒にいると楽しい。	**-.743**			
	友だちとできるだけ交わるようにしている。	**-.646**			
＊	友だちと一緒にいるより1人でいる方が気がらくだ。	**.628**			
＊	仲のよい友人グループを持っていない。	**.621**			
	親しい友だちがいる。	**-.613**			
＊	友だちと一緒になって勉強や遊びのグループをつくるのはいやだ。	**.599**			
	勉強以外のことを友だちとよく話す。	**-.585**			
＊	友だちとのつきあいがうっとうしいと思う時がある。	**.581**			
＊	友だちにはあまり大事なことは話さない。	**.568**			
＊	友だちから相手にされなくてもかまわない。	**.526**			
＊	友だちとのつきあいよりも、自分のことを大切にする。	**.465**			

註1：太字は因子負荷量が絶対値で.400以上であることを表す。
註2：＊は二宮(1990)の尺度における逆転項目を表す。
註3：分析対象者数（延べ）は、大学適応尺度がN=2208、仲間志向尺度はN=2215。

期の大学適応尺度、その下位尺度および仲間志向尺度の各得点の平均値と*SD*を算出した。その結果をTable 2に示す。次に、性別と各調査時期を独立変数、各尺度得点を従属変数とした2（性別）×8（調査時期）の分散分析を行った。その結果、大学適応、大学への信頼感、受講への苦痛および居心地のよさについては、調査時期の主効果が有意であり（各、F (5.0, 747.2) = 20.23, p < .001, η_p^2 = .120; F (5.6, 849.6) = 6.08, p < .001, η_p^2 = .038; F (5.7, 858.8) = 15.68, p < .001, η_p^2 = .095; F (5.6, 847.9) = 5.70, p < .001, η_p^2 = .036）、登校拒絶感は性別および調査時期の主効果が有意であり（各、F (1, 151) = 5.56, p < .05, η_p^2 = .036; F (5.8, 879.7) = 15.47, p < .001, η_p^2 = .093）、仲間志向は性別の主効果が有意であった（F (1, 150) = 7.50, p < .01, η_p^2 = .048）[10]。性別の主効果に関しては、女子は男子よりも登校拒絶感と仲間志向が有意に高かった。

調査時期の主効果が有意であったものについては

Table 2　1～2年次の各調査時点における各尺度得点の平均値および*SD*

	1年次				2年次			
大学適応	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
男子	3.57	3.41	3.41	3.20	3.36	3.26	3.30	3.25
(*N*=39)	*0.51*	*0.55*	*0.60*	*0.60*	*0.67*	*0.58*	*0.50*	*0.64*
女子	3.60	3.30	3.35	3.25	3.37	3.21	3.24	3.29
(*N*=111)	*0.44*	*0.47*	*0.46*	*0.48*	*0.48*	*0.52*	*0.47*	*0.50*
全体	3.60	3.33	3.37	3.24	3.37	3.22	3.25	3.28
(*N*=150)	*0.46*	*0.49*	*0.50*	*0.51*	*0.53*	*0.53*	*0.48*	*0.54*
大学信頼	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
男子	3.06	3.01	2.96	2.86	2.90	2.94	2.81	2.84
(*N*=40)	*0.64*	*0.74*	*0.78*	*0.73*	*0.83*	*0.79*	*0.65*	*0.85*
女子	3.19	2.98	2.99	2.91	2.93	2.80	2.85	2.91
(*N*=114)	*0.54*	*0.67*	*0.65*	*0.67*	*0.70*	*0.75*	*0.71*	*0.79*
全体	3.16	2.98	2.99	2.90	2.92	2.83	2.84	2.89
(*N*=154)	*0.57*	*0.69*	*0.68*	*0.68*	*0.74*	*0.76*	*0.69*	*0.80*
登校拒絶	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
男子	2.41	2.80	2.68	3.11	3.05	3.08	3.04	3.18
(*N*=40)	*1.13*	*1.07*	*1.17*	*1.17*	*1.33*	*1.17*	*0.96*	*1.08*
女子	2.65	3.37	3.23	3.42	3.12	3.45	3.46	3.40
(*N*=113)	*1.00*	*0.95*	*1.00*	*1.03*	*1.01*	*1.01*	*0.97*	*0.97*
全体	2.59	3.22	3.08	3.34	3.10	3.35	3.35	3.34
(*N*=153)	*1.04*	*1.01*	*1.08*	*1.08*	*1.10*	*1.06*	*0.98*	*1.00*

	1年次				2年次			
仲間志向	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
男子	3.70	3.63	3.63	3.49	3.57	3.55	3.60	3.58
(*N*=40)	0.54	0.64	0.58	0.58	0.63	0.59	0.57	0.55
女子	3.85	3.79	3.86	3.77	3.82	3.84	3.82	3.87
(*N*=112)	0.51	0.54	0.54	0.55	0.51	0.58	0.56	0.56
全体	3.81	3.75	3.80	3.69	3.76	3.77	3.76	3.79
(*N*=152)	0.52	0.57	0.56	0.57	0.56	0.59	0.57	0.57
受講苦痛	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
男子	2.23	2.45	2.46	2.69	2.43	2.73	2.52	2.56
(*N*=40)	*0.66*	*0.72*	*0.73*	*0.80*	*0.80*	*0.84*	*0.64*	*0.80*
女子	2.23	2.53	2.51	2.61	2.46	2.71	2.63	2.56
(*N*=112)	*0.56*	*0.64*	*0.60*	*0.62*	*0.57*	*0.68*	*0.66*	*0.68*
全体	2.23	2.51	2.50	2.63	2.45	2.71	2.60	2.56
(*N*=152)	*0.59*	*0.66*	*0.63*	*0.67*	*0.63*	*0.72*	*0.66*	*0.71*
居心地	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
男子	4.05	3.96	3.86	3.55	3.73	3.64	3.80	3.65
(*N*=40)	*0.74*	*0.80*	*1.03*	*1.02*	*1.00*	*0.88*	*1.02*	*0.99*
女子	4.06	3.81	3.90	3.78	3.93	3.82	3.76	3.88
(*N*=113)	*0.74*	*0.76*	*0.76*	*0.84*	*0.70*	*0.86*	*0.80*	*0.82*
全体	4.06	3.85	3.89	3.72	3.88	3.77	3.77	3.82
(*N*=153)	*0.73*	*0.77*	*0.83*	*0.89*	*0.79*	*0.86*	*0.86*	*0.87*

註1：上段は平均値、下段斜体は*SD*をそれぞれ表す。
註2：得点は、1項目あたりの得点に換算した。

Bonferroni法による多重比較を行った。その結果、各尺度得点について有意な差がみられたのは、以下の通りであった。

大学適応は1年次4月期が他のどの時期よりも有意に高く、1年次7月期は1年次1月期よりも有意に高く、1年次10月期は1年次1月期および2年次7月期よりも有意に高く、2年次4月期は1年次1月期や2年次7月期よりも有意に高かった。

大学への信頼感は、1年次4月期が1年次1月期以降のいずれの時期よりも有意に高く、1年次7月期が2年次10月期よりも有意に高かった。

受講への苦痛は1年次4月期が他のどの時期よりも有意に低く、1年次7月期と10月期が1年次1月期や2年次7月期よりも有意に低く、2年次4月期が1年次1月期や2年次7月期よりも有意に低く、2年次1月期が2年次7月期より有意に低かった。

登校拒絶感は1年次4月期が他のどの時期よりも有意に低く、1年次10月期が1年次1月期や2年次10月期や2年次1月期よりも有意に低かった。

居心地のよさは1年次4月期が1年次10月期以降のいずれの時期よりも有意に高く、1年次7月期と10月期は1年次1月期よりも有意に高かった。

3年次から4年次終了期における適応感の変化

次に、3年次から4年次の間の適応感の変化を調べるために、Ⅱ群のデータについて、男女別に各調査時期の大学適応尺度、その下位尺度および仲間志向尺度の各得点の平均値と*SD*を算出した。ただし、全ての時期で各尺度得点を算出できた者は、尺度により24～34名であったため、各時期で回答した人数について値を求めた。その結果をTable 3に示す。なお、各尺度の各時期におけるCronbachのα係数を算出したところ、大学適応は .807（3年次10月期）≦α≦.877（4年次4月）、大学への信頼感は .647（4年次10月期）≦α≦.861（3年次7月期）、受講への苦痛は.618（3年次10月期）≦α≦.761（3年次4月期）、登校拒絶感は .810（3年次1月期）≦α≦.942（3年次7月期）、居心地のよさは.672（3年次10月期）≦α≦.820（4年次10月期）であった。また、仲間志向は.851（4年次10月期）≦α≦.898（4年次1月期）であった[11]。

上述の通り、各時期のデータは完全に対応がないわけではないが、便宜上、対応のないデータとみなし、性別と調査時期を独立変数、各尺度得点を従属変数とした2（性別）×8（調査時期：対応なし）の分散分析を行ったが、いずれも有意ではなかった。そこで、全ての時期で尺度得点を算出できた者について同様の分析（調査時期は対応あり）を行ったところ、大学適応、大学への信頼感、登校拒絶感では、調査時期の主効果が有意であった（各、F (3.7, 80.3) = 3.02, p < .05, η_p^2 = .121; F (7, 161) = 2.90, p < .01, η_p^2 = .112; F (4.2, 133.4) = 3.34, p <.05, η_p^2 = .095）ので、Bonferroni法による多重比較を行ったところ、大学への信頼感は4年次10月期が3年次10月期よりも有意に高かったが、その他は有意ではなかった。

大学適応と仲間志向との関連について

最後に、大学適応と仲間志向の関連を調べるために、各調査時期における大学適応尺度およびその下位尺度と仲

Table 3　3～4年次の各調査時点における各尺度得点の平均値および*SD*

	3年次				4年次			
大学適応	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
男子	3.27	3.23	3.24	3.16	3.19	3.20	3.35	3.30
	0.47	*0.52*	*0.37*	*0.55*	*0.61*	*0.47*	*0.54*	*0.59*
N	32	26	25	26	26	18	22	25
女子	3.26	3.06	3.12	3.14	3.23	3.15	3.15	3.27
	0.65	*0.68*	*0.55*	*0.62*	*0.64*	*0.60*	*0.56*	*0.63*
N	52	49	47	43	54	43	29	38
全体	3.27	3.12	3.16	3.15	3.22	3.17	3.24	3.28
	0.58	*0.63*	*0.50*	*0.59*	*0.63*	*0.56*	*0.55*	*0.61*
N	84	75	72	69	80	61	51	63
大学信頼	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
男子	3.04	3.05	3.06	3.01	3.19	3.18	3.25	3.09
	0.77	*0.87*	*0.63*	*0.77*	*0.88*	*0.55*	*0.58*	*0.85*
N	32	26	25	26	26	18	22	25
女子	3.15	2.90	2.88	3.02	3.15	3.00	2.99	3.14
	0.81	*0.90*	*0.77*	*0.91*	*0.79*	*0.72*	*0.64*	*0.80*
N	53	49	48	43	54	43	29	38
全体	3.11	2.95	2.94	3.02	3.16	3.05	3.10	3.12
	0.79	*0.89*	*0.73*	*0.85*	*0.81*	*0.68*	*0.62*	*0.82*
N	85	75	73	69	80	61	51	63
登校拒絶	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
男子	3.14	3.54	3.38	3.50	3.54	3.35	3.19	3.36
	0.99	*1.07*	*0.90*	*1.06*	*1.09*	*1.31*	*1.44*	*1.37*
N	32	26	25	26	26	20	24	25
女子	3.57	3.80	3.74	3.72	3.57	3.46	3.24	3.29
	1.05	*1.16*	*1.05*	*1.05*	*1.19*	*1.29*	*1.22*	*1.19*
N	53	49	48	43	55	52	36	38
全体	3.41	3.71	3.62	3.64	3.56	3.43	3.22	3.32
	1.04	*1.13*	*1.01*	*1.05*	*1.15*	*1.29*	*1.30*	*1.25*
N	85	75	73	69	81	72	60	63

	3年次				4年次			
仲間志向	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
男子	3.63	3.78	3.39	3.45	3.63	3.65	3.35	3.53
	0.56	*0.60*	*0.62*	*0.75*	*0.73*	*0.53*	*0.76*	*0.77*
N	32	26	25	26	26	18	22	24
女子	3.60	3.65	3.58	3.49	3.80	3.71	3.58	3.78
	0.68	*0.71*	*0.69*	*0.72*	*0.63*	*0.69*	*0.57*	*0.65*
N	53	49	48	43	54	43	29	38
全体	3.61	3.69	3.51	3.47	3.74	3.69	3.48	3.69
	0.63	*0.67*	*0.67*	*0.72*	*0.66*	*0.64*	*0.66*	*0.70*
N	85	75	73	69	80	61	51	62
受講苦痛	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
男子	2.73	2.66	2.64	2.73	2.85	2.80	2.56	2.43
	0.71	*0.73*	*0.65*	*0.67*	*0.82*	*0.83*	*0.84*	*0.73*
N	32	26	25	26	26	20	24	25
女子	2.57	2.86	2.68	2.77	2.60	2.61	2.56	2.61
	0.75	*0.74*	*0.65*	*0.75*	*0.76*	*0.75*	*0.64*	*0.72*
N	53	49	47	43	55	52	36	38
全体	2.63	2.79	2.67	2.76	2.68	2.66	2.56	2.54
	0.73	*0.74*	*0.64*	*0.72*	*0.78*	*0.77*	*0.72*	*0.72*
N	85	75	72	69	81	72	60	63
居心地	4月	7月	10月	1月	4月	7月	10月	1月
男子	3.72	3.87	3.58	3.54	3.63	3.88	3.79	3.72
	0.73	*0.73*	*0.75*	*1.08*	*0.94*	*0.83*	*0.95*	*0.97*
N	32	26	25	26	26	20	24	25
女子	3.74	3.64	3.54	3.50	3.60	3.74	3.57	3.64
	0.98	*1.00*	*0.99*	*1.01*	*1.02*	*0.84*	*0.99*	*0.86*
N	53	49	48	43	55	52	36	38
全体	3.73	3.72	3.55	3.51	3.61	3.78	3.66	3.67
	0.89	*0.92*	*0.91*	*1.03*	*0.99*	*0.83*	*0.97*	*0.90*
N	85	75	73	69	81	72	60	63

註1：上段は平均値、中段斜体は*SD*、下段は各時点での回答者数をそれぞれ表す。
註2：得点は、1項目あたりの得点に換算した。

間志向尺度の相関係数を算出した。その結果をTable 4に示す。仲間志向は、居心地のよさと一貫して比較的高い相関関係がみられるのがわかる。一方、その他の下位尺度とは概ね有意ではあるものの、絶対値で.400を下回るものが多く、有意な相関すら認められない時期もみられた。

考察

本研究では、大学生が、大学入学後から卒業間近にかけて、大学生活への適応についてどのようなプロセスをたどるのかを検討した。その結果、全般的な傾向として、①入学直後の適応感は他の時期と比べて高いこと、②1年次7月期には適応感が低下すること、③1年次7月期から10月期にかけては差がみられないこと、④1年次1月には適応感がさらに低下すること、⑤2年次4月には適応感が上昇すること、⑥2年次7月期には再び低下すること、⑦2年次7月期以降は大きな変化がみられず、また、3年次以降の適応感は概ね安定していること、⑧総じて、大学適応に性差はみられなかったが、特に1～2年次において、女子は男子よりも登校拒絶感が高く、仲間志向も高いこと、⑨仲間志向には調査期間による違いがみられないこと、⑩仲間志向は大学適応と関連はするが、特に関連性が高いのは居心地のよさであり、その他は必ずしも強い関連性を持たないこと、などが見出された。

①および②については、大隅ら(2013)の結果と一致している。①については、大隅ら(2013)にもふれられている通り、入学後間もないこともあり、期待感・高揚感が強く反映していることが考えられる。あるいは、もし入学後の大学生活に不満を持った場合、入学前の期待感との間に認知的に不協和な状態が生じることとなり、それを低減させるために適応感を強く感じようとしていることも考えられる。さらに別の見方をすれば、「大学生活に適応しなければならない」と、過剰に適応しようとしている可能性も考えられる。そうであるならば、②の結果は、不適応に陥ったということではなく、むしろ、より現実的な方向にシフトしたものであると考えられよう。もちろん、7月期までには、入学後に拙速に構築された生活スタイルや友人関係などのきしみや、初めての定期試験への対応など、ストレスフルな出来事が出現し、それらが適応感の低下をもたらすと考えることもできよう。しかし後述するように、大学生活にもかなり慣れてきたと思われる1年次1月期に適応得点がさらに低下していることから考えると、現実的な適応がなされたとみたほうが適当であろう。

③も大隅ら(2013)の結果とも合致している。この間には夏

Table 4　各調査時点における仲間志向尺度と大学適応尺度・下位尺度の相関係数

	仲間志向							
	1年次				2年次			
	4月期	7月期	10月期	1月期	4月期	7月期	10月期	1月期
大学適応	.431 ***	.370 ***	.398 ***	.338 ***	.328 ***	.228 ***	.262 ***	.383 ***
N	325	289	284	254	273	272	261	245
大学への信頼感	.200 ***	.222 ***	.196 ***	.177 **	.196 **	.014	.022	.191 **
N	327	291	284	256	275	272	261	245
受講への苦痛	-.288 ***	-.206 ***	-.263 ***	-.240 ***	-.228 ***	-.232 ***	-.208 **	-.283 ***
N	327	290	285	256	275	272	261	245
登校拒絶感	-.335 ***	-.222 ***	-.232 ***	-.153 *	-.204 ***	-.080	-.120	-.160 *
N	327	290	285	257	276	272	261	245
居心地のよさ	.653 ***	.601 ***	.641 ***	.573 ***	.581 ***	.532 ***	.466 ***	.568 ***
N	328	290	285	257	276	272	261	245
	3年次				4年次			
	4月期	7月期	10月期	1月期	4月期	7月期	10月期	1月期
大学適応	.418 ***	.390 ***	.434 ***	.401 ***	.477 ***	.493 ***	.255	.578 ***
N	84	75	72	69	80	61	51	62
大学への信頼感	.201	.275 *	.363 **	.365 **	.353 **	.476 ***	.180	.510 ***
N	85	75	73	69	80	61	51	62
受講への苦痛	-.309 **	-.278 *	-.398 ***	-.180	-.355 **	-.332 **	-.028	-.348 **
N	85	75	72	69	80	61	51	62
登校拒絶感	-.385 ***	-.161	-.230 *	-.260 *	-.395 ***	-.312	-.250	-.485 ***
N	85	75	73	69	80	61	51	62
居心地のよさ	.582 ***	.594 ***	.520 ***	.553 ***	.595 ***	.453 ***	.528 ***	.618 ***
N	85	75	73	69	80	61	51	62

註：*** p <.001, ** p <.01, * p <.05

期休暇が挟まれるが、1年次の夏期休暇は大学入学後初めての長期休暇であり、そこでの生活体験がその後の大学適応にさまざまな影響を及ぼすことが予測される。しかし、夏期休暇を挟んでも適応感に差がみられなかったことから、夏期休暇は大学適応にはそれほど大きな影響を及ぼさないと考えられる。

④は新たな知見であるといえよう。この時期は後期試験が近づいていることなどがあり、それが低下の原因であると考えることもできようが、前期に試験を経験したことで、ある程度の対処方略も身につけたとも考えられることから、むしろ大学生活に対する適応がさらに進んだとみる方が妥当であろう。また、1年次10月期と2年次7月期以降に有意な差がみられなかったことから、このあたりがいわば適応の「底」といえるかもしれない。

⑤もこれまでにみられなかった結果であろう。これについては、新年度を迎え、それがいわば「仕切り直し」の意味を持ち、気持ちも新たに大学生活へ積極的に関与しようという姿勢が反映されたものと考えられる。しかし、⑥のように、2年次7月期には適応感がまた低下している。これは、4月期の積極的な姿勢が時間経過とともに弛んだ（いわゆる「揺り戻し」）ことが原因として考えられる。

⑦から、2年次7月期あたり以降、入学者の大学生活への適応感がようやく安定することが窺える。しかし、田中・菅(2007)や奥田ら(2010)は、むしろ4年次の適応感の方が高いことなどを報告しており、本研究の結果とは異なっている。これについて、本研究では特に1～2年次の分析は全ての時期の調査（計8回）に回答した者が対象となっているが、そのような者は大学生活にある程度適応していると考える方が自然であろう。それゆえ、今回の結果は、むしろ大学生活に馴化することで次第に現実的・安定的に適応していく様子を表しているといえよう。田中・菅(2007)や奥田ら(2010)との違いは、データの収集方法や収集時期、尺度の内容、各サンプルの状況などが影響していると考えられる。

ところで、本来、尺度は得点が高いほどその傾向がより強いことを表すものであり、それ以前の時期の平均得点よりも値が低いことから、2年次7月期以降を「適応感が安定している」と捉えることは不適当とみることもできよう。しかし逆に言えば、少なくともこの尺度は、得点が高くなりすぎるのも適応的とはいえないという可能性も考えられ、ある程度の得点の高さ（本研究の結果からいえば、各尺度得点の理論的中央値をやや上回った値）が、ある意味最も適応的な状態といえるかもしれない。この点については、改めて検討する必要があろう。

その他、少なくとも大学適応尺度に注目すると、1～2年次だけでなく、有意な差はみられなかったものの、3・4年次も4月期から7月期にかけて得点が低下していることから、新年度が大学生活に対する仕切り直しの役割をしつつも、それが持続できずに揺り戻されるという関係にあるが、学年が上がるにつれて、その振れ幅が縮まり、ここにも時間の経過とともに適応が定着する様子が窺える。

以上のことをもとに、大学入学者の入学から卒業までに至る適応プロセスについてまとめると、まず大学入学直後からしばらくは、大学生活への期待感や大学生になったことへの高揚感、あるいは「せっかく大学生になったのだから、

大学生活は楽しくなければならない」という過剰な思いなどから、大学生活に積極的に適応していこうとする、いわば「能動的適応」の時期であるといえよう。しかしその後、大学生活にも徐々に慣れ、過剰な適応が収まる「現実的適応」の時期に入ると考えられる。そして、夏期休暇が大学生活への適応という点では大きな影響を及ぼすことなく後期が始まり、1年次を終える頃には、適応感も底に到達し、「収束的適応」の時期へと進んでいく。しかし、新年度を迎えることで再出発への意識が高まり、それが「仕切り直し効果」となって「再能動化」が生じるが、時間の経過とともに意識が弛み、前期終了後には「揺り戻し効果」による「再安定化」へと変化し、それ以降は大きな変化を生じることなく「安定的適応」の時期に至り、卒業を迎えるという流れが考えられる。以上のプロセスについてのモデル図をFigure 1に示す[12]。

次に、⑧は、大隅ら(2013)などの、男子の方が女子よりも適応感が低いという結果とは異なっているが、藤井(1998)も大学不適応感に性差がみられない（むしろ他の指標から、女子の方が不適応的である）ことを見出しており、本研究の結果もこれと合致している。また、後述の研究2においても、大学間で男女差に違いがみられている。このように、大学適応と性差の関係については一貫した結果が得られていないようであるが、性差が大学適応に影響するという確たる根拠は不明であり、今後の検討課題といえよう。なお、女子の方が男子よりも登校拒絶感と仲間志向が高かったという点について敢えて考察するならば、水野(2002)は、女子の友人関係は情緒的結びつきを基盤とした相手との信頼関係から形成されていると指摘しており、女子の方が濃密な仲間関係を築きやすい一方で、その関係が情緒的に強すぎるあまり疲弊してしまい、「大学へ行きたくない」という気持ちが生じやすいということがあるのかもしれない。

⑨については、仲間志向尺度得点が時期によらず一定の（理論的中央値を超える）高さを保っており、友人関係に関しては安定している様子が窺える。これは、入学以降に友人関係の変化がみられないことを表しているというよりは、関係性に変動は生じるものの、基本的な枠組みは変化しない（たとえば、友人グループの分裂やメンバーの異動があるとしても、核となる友人は初期に知り合った者であるなど）ことが推察される。しかし、⑩にあるように、仲間志向は必ずしも大学適応と強く関連しているわけではなかった。この結果は、大学の中で孤立することはたしかに居心地のよくないことではあろうが、それが必ずしも大学や授業への不満に結びつくとは限らないことを表しているといえよう。これは先行研究とは異なる知見かもしれないが、大学生は、たとえば高校までの学級のような、ある程度凝集性の高い集団内での生活を求められることは少なく、大学生活に何らかの価値を見出せれば、たとえ孤立していても、ある程度適応的に過ごすことはできるかもしれない。すなわち、大学での友人関係をうまく築けなかった学生も大学で不適応に陥らずにすむ可能性は充分に残されているのではないかと考えられる。

最後に、本研究における問題点について触れておく。まずは分析対象者の問題である。本研究では、基本的に縦断的調査を行っており、何回にもわたり調査に協力した学生のデータをもとに分析を行っている。このことは、先に

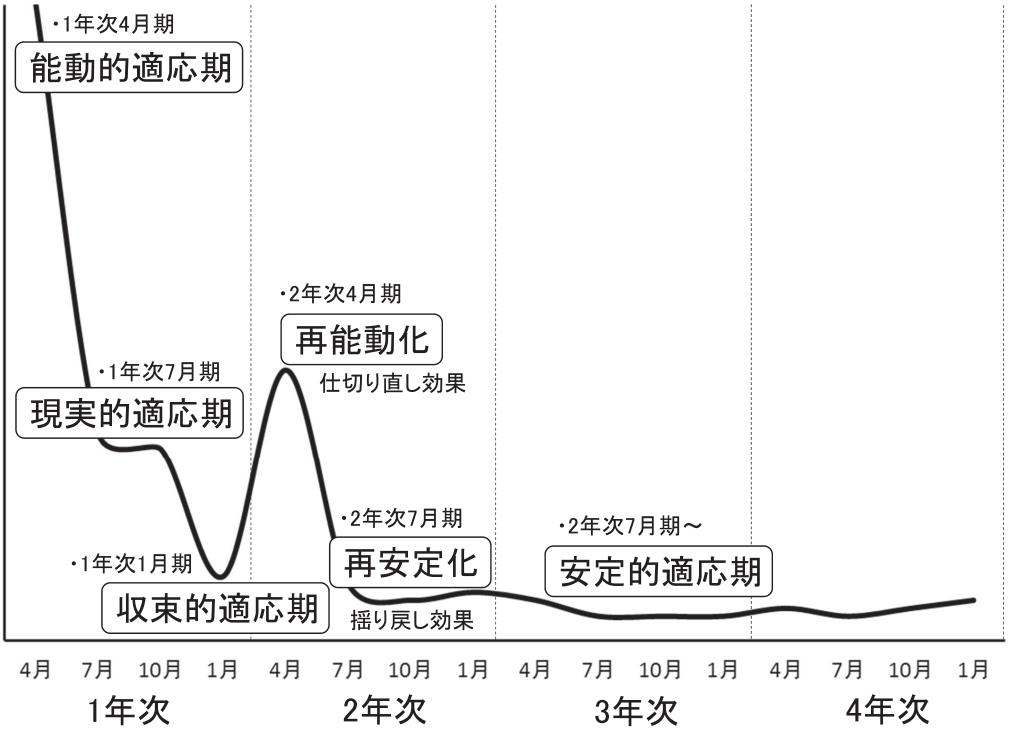

Figure 1　入学から卒業までの大学適応プロセスに関するモデル

も述べたように、そのような対象者自体がそもそも大学に適応していると考えられ、この研究は「大学生活に適応できる人々」の適応プロセスを追っているにすぎないといえるであろう。そうであれば、今回の結果は、大学生活に適応できない学生の実情や彼らに対してどのようなアプローチをすべきかなどについて、直接的な提言をしていないといえよう。今後は、Figure 1のようなモデルを大学適応者の基本形と捉え、このモデルに合致しない学生への対応を考えていく必要があろう。

次に、調査回数の問題が挙げられる。本研究では、詳細に時期を追い、長期的に調査を行っている点が他の先行研究とは大きく異なるが、一方で、同様の調査を続けることで、回答者が尺度に慣れてしまった可能性も考えられる。この影響については、本研究のデータだけでは判断することは難しいが、留意しておく必要はあろう。

その他、今回の結果がどこまで一般化できるかという問題がある。各大学にはさまざまな特徴や事情があり、ひとつのサンプルの結果が他では適合しない場合もあろう。今後もさまざまな研究等の知見を踏まえ、総合的に検討する必要があろう。

研究2

研究2では、大学入学から前期終了時に焦点を当て、いわゆる「偏差値の高い」大学とそうでない大学とで大学生活への適応プロセスにどのような違いがみられるのかを検討した[13]。

方法

調査協力者

2011年度から2015年度の間に、近畿圏の2大学に入学し、心理学の科目を受講した大学1年生に対し、下記尺度への回答を依頼したところ、1,218名（男子579名、女子639名）がそれに応じた。なお、各大学の特徴および調査協力者の内訳等は以下の通りである。

A大学：いわゆる「大規模大学」で、10以上の学部等から構成され、2017年5月1日現在の在籍者数は27,000名を超えている。今回の調査協力者数は671名（男子363名、女子308名）であり、合計12の学部に所属していた。調査協力者が所属する学部について、ベネッセと河合塾が発表している2017年度大学入試向けに公表された偏差値はそれぞれ、64～76、55～65であった。

B大学：いわゆる「中規模大学」で6つの学部等から構成され、2017年5月1日現在の在籍者数は3,300名弱である。今回の調査協力者数は547名（男子216名、女子331名）であり、全て心理学科の学生であった[14]。この学科について、同様の偏差値はそれぞれ、48～50、37.5であった。

大学適応に関する尺度・調査手続き・調査時期

使用した尺度や手続きは研究1と同じである。調査時期は、A大学は、2011年、2014年および2015年の4月中下旬と7月中下旬に調査を行った。B大学は2011年から2015年の同時期に行った。

結果

分析ソフトは研究1と同じである。また、本研究でも尺度への回答洩れ等のあるデータについては、当該分析の都度に除外した。

尺度の信頼性

各尺度について、各大学の4月期、7月期の信頼性（内的整合性）を調べるために、Cronbachのα係数を算出した。その結果、A大学では、大学適応は.808および.800、大学への信頼感は.696および.692、受講への苦痛は.638および.550、登校拒絶感は.907および.865、居心地のよさは.677および.568、仲間志向は.851および.859であった。B大学では、大学適応は.828および.832、大学への信頼感は.758および.789、受講への苦痛は.680および.662、登校拒絶感は.878および.882、居心地のよさは.632および.723、仲間志向は.865および.851であった[15]。

適応感変化の大学間比較

2つの大学で大学入学後の4～7月期にかけての適応感やその変化にどのような違いがみられるかを調べるために、各大学における各調査時期の大学適応尺度、その下位尺度および仲間志向尺度の各得点の平均値と*SD*を算出した。その結果をTable 5に示す。性別、大学、調査時期を独立変数、各尺度得点を従属変数とした、2（大学）×2（性別）×2（調査時期）の分散分析を行った。

その結果、大学適応は大学および調査時期の主効果が有意で、B大学の方がA大学よりも得点が高く、4月期の方が7月期よりも高かった。また、大学×性別および大学×調査時期の交互作用が有意であった（各、F (1, 800) = 11.53, p <.001, η_p^2 = .014; F (1, 800) = 251.57, p <.001, η_p^2 = .239; F (1, 800) = 5.74, p < .05, η_p^2 = .007; F (1, 800) = 8.61, p < .01, η_p^2 = .011）。大学への信頼感は調査時期の主効果が有意であり、4月期の方が7月期よりも高かった。また、大学×性別および大学×調査時期の交互作用が有意であった（各、F (1, 811) = 49.06, p < .001, η_p^2 = .057; F (1, 811) = 4.69, p < .05, η_p^2 = .006; F (1, 811) = 5.30, p < .05, η_p^2 = .006;）。受講への苦痛は、大学、性別および調査時期の主効果が有意で、A大学の方がB大学より高く、男子の方が女子よりも高く、7月期の方が4月期よりも高かった（各、F (1, 811) = 39.19, p < .001, η_p^2 = .046; F (1, 811) = 6.22, p < .05, η_p^2 = .008; F (1, 811) = 159.76, p < .001 η_p^2 = .165）。登校拒絶感は性別および調査時期の主効果が有意で、女子の方が男子よりも高く、7月期が4月よりも高かった。また、大学×性別および大学×調査時期の交互作用が有意であった（各、F (1, 811) = 3.98, p < .05, η_p^2 = .005; F (1, 811) = 181.44, p < .001, η_p^2 = .183; F (1, 811)

Table 5　各大学における各調査時点での各尺度得点の平均値および*SD*

大学適応		4月期	7月期	仲間志向		4月期	7月期
A大学	男子(*N*=189)	3.40 *0.50*	3.18 *0.51*	A大学	男子(*N*=192)	3.65 *0.62*	3.60 *0.57*
	女子(*N*=175)	3.47 *0.47*	3.30 *0.49*		女子(*N*=182)	3.73 *0.55*	3.74 *0.62*
	全体(*N*=364)	3.43 *0.49*	3.24 *0.50*		全体(*N*=374)	3.69 *0.59*	3.67 *0.60*
B大学	男子(*N*=167)	3.62 *0.52*	3.34 *0.56*	B大学	男子(*N*=169)	3.78 *0.60*	3.66 *0.63*
	女子(*N*=273)	3.55 *0.47*	3.28 *0.52*		女子(*N*=274)	3.79 *0.61*	3.73 *0.59*
	全体(*N*=440)	3.58 *0.49*	3.30 *0.53*		全体(*N*=443)	3.78 *0.60*	3.70 *0.60*

大学信頼		4月期	7月期	受講苦痛		4月期	7月期
A大学	男子(*N*=192)	3.14 *0.73*	3.04 *0.71*	A大学	男子(*N*=192)	2.60 *0.71*	2.91 *0.69*
	女子(*N*=180)	3.21 *0.63*	3.11 *0.65*		女子(*N*=180)	2.44 *0.59*	2.73 *0.58*
	全体(*N*=372)	3.17 *0.68*	3.07 *0.68*		全体(*N*=372)	2.52 *0.66*	2.82 *0.64*
B大学	男子(*N*=168)	3.31 *0.72*	3.10 *0.79*	B大学	男子(*N*=169)	2.27 *0.75*	2.59 *0.74*
	女子(*N*=275)	3.17 *0.60*	2.98 *0.74*		女子(*N*=274)	2.25 *0.61*	2.54 *0.66*
	全体(*N*=443)	3.22 *0.65*	3.02 *0.76*		全体(*N*=443)	2.26 *0.66*	2.56 *0.69*

登校拒絶		4月期	7月期	居心地		4月期	7月期
A大学	男子(*N*=192)	2.84 *1.12*	3.31 *1.05*	A大学	男子(*N*=192)	3.73 *0.80*	3.70 *0.79*
	女子(*N*=180)	2.88 *1.14*	3.25 *1.06*		女子(*N*=181)	3.80 *0.78*	3.87 *0.84*
	全体(*N*=372)	2.86 *1.13*	3.28 *1.05*		全体(*N*=373)	3.76 *0.79*	3.78 *0.82*
B大学	男子(*N*=169)	2.57 *1.16*	3.18 *1.16*	B大学	男子(*N*=168)	4.02 *0.79*	3.83 *0.94*
	女子(*N*=274)	2.84 *1.05*	3.46 *0.97*		女子(*N*=275)	3.98 *0.72*	3.78 *0.84*
	全体(*N*=443)	2.74 *1.10*	3.35 *1.05*		全体(*N*=443)	4.00 *0.74*	3.80 *0.88*

註1：上段は平均値、下段斜体は*SD*をそれぞれ表す。
註2：得点は、1項目あたりの得点に換算した。

$= 4.79, p < .05, \eta_p^2 = .006; F(1, 811) = 6.45, p < .05, \eta_p^2 = .008$)。居心地のよさは、大学および調査時期の主効果が有意で、B大学の方がA大学よりも高く、4月期の方が7月期の方が高かった。また、大学×調査時期の交互作用が有意であった(各、$F(1, 812) = 6.49, p < .05, \eta_p^2 = .008; F(1, 812) = 9.51, p < .01, \eta_p^2 = .012; F(1, 812) = 15.17, p < .001 \eta_p^2 = .018$)。仲間志向は、調査時期の主効果が有意であり、4月期の方が7月期よりも高かった($F(1, 813) = 8.67, p < .01, \eta_p^2 = .011$)。

交互作用が有意であったところに関しては単純主効果の検定を行ったところ、大学適応は、男子はB大学の方がA大学よりも得点が高く、A大学では女子の方が男子よりも高く、両大学とも4月期の方が7月期よりも高かった。大学への信頼は、B大学では男子の方が女子よりも高く、両大学とも4月期の方が7月期よりも高かった。登校拒絶感は、男子においてA大学の方がB大学よりも高く、B大学で女子の方が男子よりも高く、両大学とも4月期よりも7月期の方が高かった。居心地のよさについては、4月期にはB大学の方がA大学よりも高く、B大学で4月期の方が7月期よりも高かった。

考察

本研究は、大学新入生の大学への適応に影響すると思われる要因として、大学の偏差値を取り上げ、いわゆる偏差値の高い大学とそうでない大学の学生とで、適応プロセスにどのような違いがみられるかを検討することを目的とした。その結果、①いずれの大学も概ね、適応的な指標(大学適応・大学への信頼感・居心地のよさ、仲間志向)は4月期が7月期よりも、不適応的な指標(受講への苦痛・登校拒絶感)は7月期が4月期よりも、それぞれ値が高く、7月期の方が適応感が低くなっていること、②性別や時期による違いが一部にみられるものの、特に大学適応や受講への苦痛において、B大学の方がA大学よりも適応的であったこと、③性差に関して、受講への苦痛は総じて男子の方が女子よりも高いが、大学適応・大学への信頼感・登校拒絶感は大学によって異なること、などが明らかにされた。

①は研究1や先行研究とも合致しており、偏差値の高さに関わらず同様の現象が生じることが明らかとなった。すなわち、大学という新しい環境に入ること自体が期待感や高揚感もしくは過剰適応感をもたらすが、やがて落ち着きを取り戻すという、能動化から現実化へのプロセスは、偏差値の高さが関係しない共通の現象であるといえよう。

②は、むしろ偏差値が高くない大学の学生の方が大学生活に適応的であることを表しているおり、清水(2013)やベネッセ総合研究所高等教育研究室(2007)などの指摘とは反対の結果になっているといえよう。これらの指摘と本研究とでは、取り上げている指標に違いもあり、一概には言えない部分もあるが、各大学の入学者の大学生活への期待の違いが現れた可能性が考えられる。すなわち、偏差値の高い大学に入学した者の方が、難関の試験に合格するために受験勉強に勤しむなど、入学のために多くのコストをかけてきたと考えられるが、その分、入学後の大学生活への期待も大きくなっていることが予測される。それゆえ、彼らは期待の大きさと現実のギャップをより感じやすいと考えられる。一方で、偏差値が高くない大学の学生は、高い学生と比べれば、そのギャップは小さく、それがこのような差として表れたのではないかと考えられる。そうであれば、偏差値の高低をもって入学後の適応を予測するのは、必ずしも適切ではないといえよう。

しかし、このような差については、単に偏差値の問題というよりも、むしろ大学の規模が影響していると考えられる。一般に偏差値の高い大学は規模の大きいところが多いようであり、本研究のサンプルもそのようになっている。規模という点で考えると、規模が大きい大学では、大きさゆえに、個々の学生へのケアなどを行き渡らせるのに時間がかかるが、規模が大きくない大学は比較的スムーズに対応できることが推測される。もちろん大規模大学では、施設や諸活動、その他さまざまなサービス等が充実しており、その点では満足度は高いであろうが、個々のケアなどにおいては、規模が大きくない大学の方が長けている場合があると考えられる。今回の結果は、そのような特徴が反映されたにすぎない可能性があることも考慮しておく必要があろう。

③に関しては、研究1でもふれたように、性差が大学適応に影響するという確たる根拠は不明であるが、受講への苦痛に関しては、広沢(2007)が女子の方が学習面で適応的であることを見出しているのと合致している。ただし、広沢(2007)も理由については不明としており、やはり今後の検討課題であろう。

最後に、本研究についても研究1と同様の問題点が潜んでいることに留意すべきである。また、各大学の調査協力者には、在籍している大学への適応感しかたずねておらず、各人の入学までのコスト感、入学への不本意感、基本的な意欲など、さまざまな指標をふまえたうえで検討することも必要である。さらに、研究1と異なり、調査時期が1年次の前期に限られており、本稿の趣旨に沿うならば、それ以降についても検討していく必要がある。

引用文献

ベネッセ教育総合研究所高等教育研究室 (2007). 学生満足度調査の概況 ベネッセ教育総合研究所(編) 学生満足度と大学教育の問題点2007 Pp. 97-105. Retrieved from http://berd.benesse.jp/berd/ center/open/report/manzokudo/2007/pdf/data_06.pdf (2017年10月3日)

藤井義久 (1998). 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, *68*, 441-448.

濱名 篤 (2004). 日本における初年次教育の課題―大学新入生調査結果より― 平成13-15年度科学研究費研究成果報告書ユニバーサル高等教育における導入教育と学習支援に関する研究, 65-84.

広沢俊宗 (2007). 大学新入生の適応に関する研究（Ⅰ）―学習面での適応－不適応に関わる諸変数の検討― 関西国際大学研究紀要, *8*, 121-138.
岩田淳子・林潤一郎・佐藤 純・奥野 光 (2016). 2015年度学生相談機関に関する調査報告 学生相談研究, *36*, 209-262.
吉良安之 (2001). 入学期の特徴 鶴田和美（編） 学生のための心理相談 培風館 Pp. 12-23.
水野邦夫 (2002). 恋愛・友人関係観の性差に関する研究 聖泉論叢, *10*, 81-92.
文部科学省（2014）. 学生の中途退学や休学等の状況について Retrieved from http://www.mext.go.jp /b_menu/houdou/26/10/__icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf（2017年10月3日）
文部科学省（2017）. 学校基本調査―平成29年度結果の概要― 調査結果の概要（初等中等教育機関、専修学校・各種学校）Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2017/08/03/1388639_2.pdf (2017年10月2日）
奥田 亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 (2010). 大学1回生から4回生までの横断および縦断データから見た大学生活充実度の推移 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, *9*, 1-14.
大隅香苗・小塩真司・小倉正義・渡邉賢二・大崎園生・平石賢二 (2013). 大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討―第1志望か否か、合格可能性、仲間志向に注目して― 青年心理学研究, *24*, 125-136.
太田伸幸・甲村和三・児嶋文寿 (2008). 大学適応感の変化に関する一考察―教職課程履修性を対象とした縦断調査より― 愛知工業大学研究報告, *43*, 1-10.
清水 一 (2013). 大学の偏差値と退学率・就職率に関する予備的分析：社会科学系学部のケース 大阪経大論集, *64*, 57-70.
高下 梓 (2011). 大学新入生の適応感の変化―4月から7月にかけての初期適応過程― 明星大学心理学年報, *29*, 9-19.
田中 存・菅 千索 (2007). 大学生活不安に関する心理学からのアプローチ 和歌山大学教育学部紀要（教育科学）, *57*, 15-22.
谷島弘仁 (2005). 大学生における大学への適応に関する検討 人間科学研究（文教大学人間学部）, *27*, 19-27.
山田ゆかり (2006). 大学新入生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要, *6*, 29-36.

註

[1] 本研究のデータの一部は、日本教育心理学会第57・58回総会、日本心理学会第79回大会等で発表された。

[2] 文部科学省(2014)は、大学を中途退学する理由として、「経済的理由(20.4%)」が最も多いとしており、中途退学が必ずしも大学への不適応を表すとは限らないかもしれない。しかし同時に「転学(15.4%)」・「学業不振(14.5%)」・「学校生活不適応(4.4%)」なども理由として挙げられていることや、他の理由の背景にも不適応が関わっている可能性があることなどから、ある程度は不適応を表す指標と考えられる。

[3] 実際には、このほかに留学生や編入学生、社会人経験者、再履修生なども回答に応じたが、他の多くの学生と環境的条件が大きく異なると考えられたので、今回のデータには含めていない（以下同様）。

[4] 調査協力者のうち71名（男子28名、女子43名）は、Ⅰ群でも回答している。また、2013年度入学者の2016年度4～10月期実施分については、実施の際に不備がみられた項目があったため、その回答は削除して分析した。

[5] この尺度は、本来は中学生・高校生の学校生活に対する意識を調べるために作成されたものであるが、大学生活の調査にも違和感がないと判断した。ただし、項目中「生徒」という表現が1箇所みられたので、ここに限り、「学生」と改めた。

[6] 回答者には、これ以外の尺度等にも回答したが、それらは本研究において分析対象としていないため、詳細は割愛する。

[7] 因子負荷量の符号や他の因子の解釈に基づけば、ここは「居心地の悪さ」と解釈すべきではあるが、二宮(1990)における逆転項目がプラスの符号の項目に相当したため、敢えて居心地のよさと解釈した。

[8] 大学適応尺度の「学校に対して反発を感じる」は、第2、4因子において.400以上の負荷量を有しているが、その大きさから、第2因子を構成する項目とした。

[9] ただし、全ての調査時期に回答をしているが、回答洩れのために、ある尺度の得点が算出できなかった者がいる。

[10] Mauchlyの球面性の検定の結果が有意であった場合は、Greenhouse-Geisser検定を行ったため、自由度の値は整数ではない（以下同様）。

[11] Ⅱ群のデータについても、Ⅰ群の時と同様の因子分析を行ったが、ほぼ同様の因子構造が確認された。

[12] 3年次以降には、たとえば「ゼミナール」のように、新たな形態の授業が始まったり、4年次には就職活動や卒業研究などのイベントが本格化したりすることで、学生自身に大きな負荷がかかることが予測される。しかし、それらのことが仮に個人的にストレスフルであったとしても、大学生活自体への捉え方を変えなければならないわけではないと考えられる。それゆえ、3年次以降の適応感に大きな変化がみられなかったのであろう。

[13] 研究2では1年次4月期と7月期の比較のみになっているが、A大学において長期間調査を行う環境が整わなかったため、この時期のみの調査とした。

[14] この中には研究1のⅠ群のデータが含まれる。

[15] 大学適応尺度を大学別に各月期ごとに因子分析を行ったところ、両大学での因子構造にはかなりの違いがみられ、これがα係数低下の原因であると考えられる。しかし、研究1と比較しやすいように、敢えてそのままの下位尺度を用いた。

A study on processes to adjust to university life of matriculants: Investigation of changes from entrance to graduation and effects of deviation values

Kunio MIDZUNO

Abstract

This study investigated how matriculants (entrants into university) had adjusted themselves to university life from entrance into university to graduation and how deviation values of universities had effects on adjustive processes. In study 1, surveys on adjustment to university life were performed to matriculants for every about three months until graduation after entrance, and degrees of adjustment in each period were investigated. Results revealed that scores on adjustment 1) were highest in the entrance period, 2) decreased in the end of the first semester, 3) decreased more in the end of the second semester, 4) increased in the beginning of the third semester (the second grade), 5) decreased again in the end of the third semester, 6) had few changes afterwards. Results were discussed as follows. The first step: matriculants have excessive expectation and elation to university life just after entrance, and try to adjust actively (active adjustment). The second step: they have gradually accepted real university life (actual adjustment). The third step: their adjustment become more stable (settled adjustment). The fourth step: in the beginning of the second grade, their sense of adjustment are activated again (reactivation). The fifth step: activated sense of adjustment are calmed down, and adjustment keeps stable (re-stabilization and stable adjustment). In study 2, differences of adjustment processes between the high-ranking university and not so high-ranking one were investigated. Results showed that 1) scores on adjustment in the end of the first semester decreased more than ones in the entrance period in both universities, 2) several scores in not so high-ranking university were higher. It was considered that active adjustment in the entrance period were found regardless of ranking of universities, and the small size of universities, which seemed to be related to low deviation values, had more positive effects on adjustment.